



愛知淑徳大学

URL=<http://www2.aasa.ac.jp/org/igws/index.html>

ジェンダー・女性学研究所

INSTITUTE FOR GENDER AND WOMEN'S STUDIES
Newsletter

第24号

発行年月日：2007年10月1日
〒480-1197 愛知県愛知郡長久手町長湫片平9
Phone 0561-62-4111 EX 2498
FAX 0561-63-9308
E-mail : igws@asu.aasa.ac.jp

IGWS 第24号ニュースレターの目次

- 第17回定例セミナー報告 1
- 第17回定例セミナー学生感想文 3
- 研究紹介―「女の子の攻撃性：関係性攻撃について考える」..... 4
- バックラッシュと腐女子ブーム 5
- 『あいち国際女性映画祭2007』トークセッションに参加して 6
- ジェンダー・女性学研究所からのお知らせ 7
新所長挨拶／第19回定例セミナーのお知らせ
- 2007年度後期ジェンダー関連授業紹介 8

2007年7月9日（星が丘キャンパス）、10日（長久手キャンパス）の2日間にわたってジェンダー・女性学研究所第17回定例セミナー「人生いろいろ生き方いろいろ―男女共同参画社会がめざすこと」を開催いたしました。以下はその概要です。

長久手・星が丘
両キャンパス
セミナー

講師 中村 彰氏 (Men's Center Japan 運営委員)

人生いろいろ 生き方いろいろ ―男女共同参画社会がめざすこと―



男性学へのきっかけ

男性学へ入るきっかけとなったのは、フェミニズムとの出会いからであった。20年ほど前、お墓に関するアンケート調査をする一人の女性と知り合った。そのアンケート結果から「夫と同じ墓は嫌」という妻たちがいることを知って非常に驚いた。上野千鶴子氏が「死後離婚」と名づけた妻側からの不満は、夫婦の関係がすでに破綻していること、そして、フェミニズムが問題視してきた女性の抑圧の結果であることを、そのときはじめて理解できた。

ウーマン・リブやフェミニズム、女性学が世間で認知されて、伝統的な女性の役割が見直されていく中で、男性の役割はどう考えたらよいのだろうか。男性もまた抑圧されているのではないか、という思いからメンズ・リブを立ち上げた。女性にとって生きやすい社会は男性にとっても生きやすい社会でなければならない

という意識からだった。

感情を我慢する男子

しかし自分自身も一人の男性として人生を振り返ると、幼児期から「男の子」であることを繰り返し意識させられてきた。転んでも「男の子でしょ」、「男の子は泣かない」と言われ、感情を抑えることを周りから要請されてきた。中高年男性にはあるがままの自分を伝えられない人が多い。阪神大震災後の共同生活の中で、疲れが目立ったのも男性が多かった。弱音を吐いたり自分をさらけ出したりできないため、女性たちのように周りとは協調して苦難を乗り越えるのができないからだった。こうしたコミュニケーション不足が、夫婦間にもひずみを作り出すことになる。

デートDVとジェンダーの非対称性

若い人々のコミュニケーションはどうなっているのだろうか？最近デートDVが問題になっている。デートDVにもジェンダーの問題が潜んでいる。DVは身体的暴力だけでなく精神的拘束という暴力も含むが、圧倒的に女性が被害者になりやすい。つまり、男女二人の関係が支配する人とされる人という関係になっていくのである。相手の髪型や服装に対して自分の好みを押し付けること、自分の行動に合わせるように相手の行動を束縛すること、メールの内容や手紙などを見せると強要すること、などは相手の暴力的態度のサインとなりうる。もちろん、男女いずれもが支配する側に立つ可能性はあるのだが、やはり女性が男性に従う傾向になりやすいといえる。

このような男女のジェンダーによる非対称性はよく目にする現象だろう。幼い子どもが重病になったとき、

父親は母親ほど子どもの闘病に寄り添ってやれるのだろうか。たとえ男性の側に女性並みに看護しようという態度を示しても、世間の受け止め方は非対称的ではないだろうか。たとえば、入院した妻に夫が付き添う場合、世間は夫の看護ぶりをほめる一方、収入源である夫の仕事は大丈夫かと気にする。ところが、入院した夫に妻が付き添う場合、妻が看護をするのは当然視され、妻の仕事の心配などはしないものである。

よりよい男女の関係

男女共同参画社会の人間関係のあり方とは、男女が固定した役割を演じることなく、それぞれの関係性を重視することである。多様な個性を認めあい、互いを抑圧することなく、男女が生きやすい社会を築いていきたい。

(文責 IGWS運営委員 平林美都子)



第17回定例セミナー

学生感想文

ジェンダー・バイアスからの解放、男性さえも。

楠 一期

今回ジェンダー・女性学研究所の定例セミナーへ参加した。まず始めに講師の中村彰氏の紹介で、日本における先駆者のメンズ・リブの提唱者で全国をめぐっておられると伺った。恥ずかしながら私にとってメンズ・リブという言葉は初耳だった。ウーマン・リブ（女性解放論）はかろうじて耳にしたことがあった。女性があるのだったら当然男性にもあるだろうと直感的に思いはしたものの、中身が、つまり何を訴えるのか思い浮かばなかった。そこから中村氏の話へぐいぐい引き込まれていった。

「ジェンダー論の発端は女性の目線でもって社会をとらえることから始まっている。そこからウーマン・リブが生まれたわけであるが、今の社会は男性にとっても生きにくくなっているのである」と説明された。中村氏はメンズ・リブの活動の一つとして「男性のための悩み相談」を行っている。世の男性も女性同様に多くの悩みを持ち苦しんでいる。中村氏自身も会社では猛烈な競争の中で仕事をこなし、家庭でも妻に弱み

を見せられない辛さがあったという。そうした苦しみは「男らしさ、男としての」という性規範によるのだ。

私はこの春就職活動を経験した。面接官に「残業はできますか、転勤はかまわないですか」と聞かれた。というよりも念を押された。私は「はい」と答えるしかなかった。今思うとあれが世の男性を苦しめる働く男のあるべき姿なのか、あれが企業戦士をつくり上げる最初の工程だったのかと思ってしまった。これから社会に出てどれだけのジェンダー・バイアスに遭遇するかを考えただけで働く意欲も失くしてしまいそうである。では私が主夫になっても良いではないかと、メンズ・リブ的な発言をしたところで私の周りには理解してくれる人はいなかった。もはや男女共同参画社会になって欲しいなどと他人任せにしている場合ではない。自分が何をすべきか考えなくてはならないようだ。そして自分らしく生きていこうと思った。

(本学現代社会学部4年)

土江 綾

私はこの講演を聞く前までは“女性学”しか考えたことがなく、この講演で初めて“男性学”という言葉を知り、その存在を理解しました。女性学があれば男性学があるのは当然のことなのに、今まで考えなかったのは自分が女性であるからなのだろうと思います。中村先生は話の中で「今の社会は男女平等と言われていたけれど、まだまだ多くの場面で男女の差が見られる。それは男女の考え方の差であり、お互いの理解のなさが生み出すものなのだろう」ということをおっしゃっていました。

「女性」と「男性」の意見対立ではしばしばどちらかが折れて意見を引っ込める「オレ（折れ）イズム」という現象が見られるらしいのですが、これはいけないことで、繰り返すと夫婦間では熟年離婚や定年離婚につながると思います。中村先生は何度も「それを解決するには、互いに意見の違いをすり合わせる事が重要である」とおっしゃっていました。また、男性に

も「更年期障害」があることは、この講演で初めて知りました。「更年期障害」は女性だけの病気だと思っていたので、すごく衝撃を受けました。

女性が抱えている問題は女性だけのものではなく、同じように男性が抱えていたりする。女性の問題を女性だけで考えず、男性の問題を男性だけで考えず、男女ともに話し合って理解しあうことが大切なのだと気づきました。性差がなくなって皆同じになれば世の中ももっとうまくいくのかもしれませんが、人は皆全く違った個体で、ぴったり同じになることはできません。どうしても差が生まれ、違いが生じます。しかし、同じになれなくても、理解することはできます。違いを理解し認め合うことができればその差は十分埋めることができます。大事なことは、互いを理解しようという気持ちで、理解しようとする努力を続ければ、男女ともに生きやすい世の中になると私はこの講演を聞いて思いました。

(本学文化創造学部4年)

研究紹介

『女の子の攻撃性：関係性攻撃について考える』

磯部 美良氏

愛知淑徳大学現代社会学部に在籍中、ジェンダー問題に関心を持つようになった。当時私は、不登校の子どもや障害を持つ子どもをキャンプに連れて行くボランティア活動に打ち込んでいた。その活動のなかで、次のような現象を目にしたことが、私の研究の原点となった。それは、不登校児のキャンプに参加したときのことだった。私は、5人の女子グループのリーダーだったのだが、自由遊びの間、この5人グループがどうしても2人と3人、あるいは2つのペアと1人、というふうに分裂してしまうことに頭を悩ませていた。グループが2つに分かれるならまだいいが、3つになってしまうと独りになった子どもが辛い思いをする。この現象は、他の女子グループでも見られたようだった。ところが、男子はというと、グループの枠を超え、十数人で野球やサッカーを楽しんでいるではないか。私にはこれが不思議に思えた。いくつか疑問は浮かんだけれど、「なぜ女の子はグループ化するのか」ということに最も興味が惹かれた。私はこの疑問を、仲間関係において生じる問題の一つである「いじめ」という現象を通して考えてみることにした。

國信ゼミでの卒業論文では、いじめの文献研究を行った。そのなかで、女子は仲間外れ、無視というタイプのいじめを示すこと、しかし、多くの研究者は身体的攻撃や金品のたかりといった、どちらかと言うと男子に多く見られるタイプのいじめに注目して対策を論じており、女子の問題は蔑ろにされていることに気がついた。

修士課程に進み、そこで、関係性攻撃という概念を知った。関係性攻撃とは、仲間外れ、無視のように、仲間関係を操作することによって相手を傷つける行為を指す。この概念は1995年、アメリカの研究者Crickによって提唱されたばかりの、まだ新しい概念だった。彼女の論文を読み、この関係性攻撃こそが、いじめ問題解決の糸口になると思った。私の進学した大学院はSST (Social Skill Training; 適切な対人スキルを身につけさせる指導) を研究、実践している全国でも珍しい所だった。そこで私は、関係性攻撃の低減を目指したSSTプログラムを開発すべく、関係性攻撃を示す子どもの対人スキルの特徴を調べることにした。対象は、まだ可塑性の高い幼児とした。続く博士課程では、関係性攻撃児の仲間関係の特徴を調査し、最終的にはSSTのプログラムを開発、実施するに至った。結果は満足のいくものだった。現在は、幼児の関係性攻撃と親の養育スキルの関連について、縦断的な調査を行っている。

さて、関係性攻撃と身体的攻撃とでは、いったい何が違うのだろうか。私の研究によると、どちらの攻撃を示す子どもも気持のコントロールが難しい点で共通している。一方、関係性攻撃を示す子どもに特徴的なのは、彼(女)らの仲間関係のあり方だ。彼女らの仲間関係は非常に親密かつ排他的なのである。こうした特徴は、女性の対人関係ではよく見られるものであり、女性に関係性攻撃が多いことと無関係ではない。また、女性は一般に、一人ぼっちになることを極端に恐れる。この場合、「あなたはもう私の友達じゃない」という一言が大きな脅威となる。

例えば、私がSSTの対象とした女兒は、自分から仲間働きかけることのできない子どもだった。しかし、ひとたび友達から誘いがあると非常に操作的になり、気に入らない子どもを排除したり無視したりした。一見すると人気児に見えるのだが、その実体は不安定なものだった。彼女は一人ぼっちにならないため、関係性攻撃によって友達のキープしていたのだ。

では、関係性攻撃を抑えるためには何をすればよいか。それは、関係性攻撃に代わる適切な行動を教えることだ。すなわち、自分の感情に向き合い問題を解決するスキルや仲間関係を形成し維持するスキルを教えること、加えて多様な仲間と関わる経験をさせることが必要だ。それは年齢が幼いほど効果があるだろう。また大人は関係性攻撃に気づく目を持たねばならない。ある調査によると、大人は関係性攻撃の問題を軽視する傾向にあるという。しかし、それは大きな間違いだ。Crickらは、関係性攻撃を頻発する女兒が、数年後、境界性人格障害や摂食障害の傾向を示すことを明らかにしている。こうした問題を予防するためにも、関係性攻撃を頻発する子どもを早期に識別し、適切な指導をすることが大切なのだ。

最近、『教室の悪魔』という本が出版され話題を呼んだ。この本は、いじめの被害者を守るという視点で書かれた、優れた本である。ところがタイトルだけを見て中身を読まないで、いじめの加害者は“悪魔”であり、どのような指導も無駄だという印象を持ちかねない。私はそうではないと声を大にして言いたい。最近の私の研究によると、関係性攻撃を頻発する子どもは、母親から関係性攻撃を受けている。子は親を模倣しているのだ。そういった子どもは、適切な行動を学ぶ機会を必要としているのである。

(本学卒業生、現明治大学・日本学術振興会特別研究員)

バックラッシュと腐女子ブーム



若松 孝司

「違いを共に生きる」を理念とする本学では、ジェンダーに対する学生の意識は高いといえるが、一步学外に出てみると、そこは未だに男女の役割がはっきりと意識される世界が広がっている。テレビドラマでは胸の大小がクローズアップされ、女性の派遣社員が会社の不条理と戦っている。駅ではピンクの色調でまとめられたガラス張りの料理教室が、道行く女性に「料理のできない女性なんて……」と脅迫している。名古屋市内でも最近ではメイド喫茶なるものが大流行で、メイド服に身を包んだ女性が「おかえりなさいませ」と、うやうやしく「ご主人様」にお仕えしているようだ。前首相が掲げた「美しい日本」のいう「本来持っている良さや『薫り豊かな』もの、途絶えてはいけないもの、失われつつあるもの……」には、こうした女性の姿も含まれているらしい。

2000年ごろを境に、ジェンダー・フリー（ジェンダー・イクオリティ）運動に対する保守派からのいわゆる「バックラッシュ」が多くの場面で目にされるようになった。男女共同参画社会基本法の制定以降、各地で採択された男女平等や共同参画に関わる条例には修正や空文化が目立つ。家庭科や子育て支援の現場でも「伝統的家族観」が重視されるようになってきた。ジェンダー・フリーなぞとんでもない、ジェンダーという言葉ですら使用するのが憚られるところもあるという。

そんな折、「腐女子」がブームとなっている。腐女子とは「腐女子」をもじった言葉で、男性同性愛を描写した作品を好む人やアニメのキャラクターやアイドルなど、自分の好みの男性同士の恋愛を妄想する趣向がある女性のことを意味する。こうした男性同士の性愛関係を描いた女性向けの漫画や小説は、以前は「やおい」と呼ばれ、コミケや同人誌など一部の愛好家に限られた存在であったが、最近では「ボーイズラブ」として一般の図書や映画、演劇として公開されるようになった。それにともなって、これらの愛好家としての「腐女子」の活動にも注目が集まっているのだ。

こうした「腐女子」ブームは、女性を蔑視するバックラッシュの風潮を反映しているようにも見える。たしかに、各種の電子掲示板の書き込みを見ると、反動的な男性（と思われる書き手）が女性に対して罵声を

浴びせる際の言葉として「腐女子」が使われていることが多い。これに対しては、「女性を『腐』扱いするとはけしからん」、「『女の腐ったような』とは女性蔑視の最たるものだ」、「女性自らが『腐女子』と称して、自分たちを卑下するとは何事だ」という反論が用意されよう。

しかし、ひとつ注目したいことがある。「腐女子」は、これまでのように女性に与えられた名称ではなく、「やおい」や「ボーイズラブ」を愛好する女性が「自嘲的」に使い始めた言葉である。あくまで自らを指し示す言葉として使用され、他者からの使用は好まれないという特徴を持つ言葉なのだ。

かつてのウーマン・リブは男性から疎まれる存在であった。男女雇用機会均等法は女性の処遇を規定する法律ではあるけれども、あくまで女性は法を適用する対象であり、女性を客体として扱ってきた。女性向けの、女性をターゲットにした販売戦略もまた然り。女性のお気に召すように、女性の声を取り入れた販売戦略ではあるけれども、女性は最後までお客さまのままであった。このように、これまで女性は自律的な存在として扱われたことがほとんどなかったために、既存の男性社会に対しては、自らを正統な存在として、強く示さざるを得なかった。フェミニズムの主張は「正しく、強い正義」であることが要求されたのだ。男子学生や一部の女子学生にみられる、フェミニズムへの距離感、あるいは一種の嫌悪感というものは、そうした女性学・運動の「正しく、強い」主張に対して感じる「けむたさ」や「ひそかな反発」によるところが大きいのではないだろうか。

この中で「どうせアタシは『腐女子』ですから……」という自嘲の持つ力は大きい。ただ与えられた立場や概念に甘んじるのではなく、女性自らが選んで「腐女子」を自称していることは大きな出来事である。昨今のバックラッシュがフェミニズムという強い主張に対する既存の男社会からの反発であるならば、自らを「腐」と自嘲してその攻撃をかわす「腐女子」の振る舞いは、高等戦術であるといえよう。自らを卑下する相手に対しては、それ以上の攻撃を与えるすべを持たないのだ。

（本学文化創造学部 准教授）

『あいち国際女性映画祭 2007』トークセッションに参加して

2007年9月5日から9日まで、財団法人あいち男女共同参画財団の企画による「あいち国際女性映画祭」がウィルあいちを拠点に開催された。期間中女性映画監督による話題の映画をはじめ、数多くの作品が6つの会場で上映された。そのイベントの一つに『映画の中のジェンダー～学生たちの視点～』があり、本学学生2名が参加した。

中野 聡大

「ジェンダー」という言葉を知ったのも最近の私なのですが、今回、あいち国際女性映画祭の学生トークセッションに参加させていただきました。今回のように、他大学の学生の方と一緒に何かをするということは今までおそらくなかったと思われるので、情報収集など若干苦労したこともありましたが、一期一会の精神で楽しむことができました。

「さくらん」は江戸時代の吉原遊郭を舞台とした映画で、私はその遊郭という場所の中でも強く生きる主人公きよ葉から強さやたくましさを感じたのですが、やはり人の考え方はいろいろで、私には考えもしなかったような意見が出てくることもありました。しかし逆に、トークセッション参加者は私以外みなさん女性だったので、もちろん私の私とは意見が食い違うだろうと思っていた点において意見が合致したりすることもありました。私はもしかしたら、男女平等化を意識しすぎることで、女性を自分の型にはめてしまい、現在問題になっているものとは別の視点で、女性を差別してしまっていたのかもしれない。同世代の人と共に話し、考えを知ることができたことで、私の視野は以前よりもずっと広がった気がします。

男女雇用機会均等法や女性の権利条約など、女性は社会的には男性と差別されることなく、平等であるとされていますが、実際のところ労働というカテゴリーの中では、給与面でも待遇面でも男性と同等には扱われていないのが現状です。真に平等な社会をつくるためには、男女共に全ての人がこの問題について考えることが必要です。私はトークセッションの準備の中で、いろいろなことを知ったことで、男女平等について以前よりもずっと真剣に考えるようになりました。私にとってはさまざまな面で収穫多き映画祭だったと思います。(本学現代社会学部3年)



伊藤 真希

あいち国際女性映画祭の学生トークセッション「カッコよく生きたい女たち～『さくらん』にみるジェンダー表象～」に参加しました。蜷川実花の映画『さくらん』は吉原の遊郭が舞台で、主人公きよ葉の遊女としてのサクセスと、吉原という塀の中からの外界への憧れと脱出が描かれています。

主人公のきよ葉は私にとっては、無謀な行動や幼さばかりが目につき、現代の暴走族やヤンキーという不良のようで、とてもかっこいい人ではありませんでした。しかし、きよ葉が吉原を否定するため激しく反発し、周囲に流されながらも奮闘する姿に、共感できる人たちもいることをトークセッションで気づかされました。きよ葉に共感できる人は、友達や親のまなごしを気にして正直に嫌なことをイヤ、欲しいものをホシイとみんなに言えないからでしょう。

かっこよく生きるとはどんなことでしょうか。キャリアウーマンになってバリバリ男に負けないで働くという人もいましたが、私の場合は抽象的ですが、なりたい自分になることです。キャリアウーマン、主婦、普通のOL、芸術家、花屋、消防士、エンジニアどれもなりたいたいものになればいいと思います。今までは、女には向かない職業や男には向かない職業などの思い込みという障壁がありました。現在多様性を認める言葉が普及しそれを実践しようとする人もいますが、実際には進んでいません。それは固定された価値観を手放せずにいるためかもしれません。それを放り出すことで、自分らしく生きることも、誰かに自分らしく生きてもらうこともできるのではないのでしょうか。

トークセッションでは、同世代でも考え方が大きく異なる人がいることを知りました。客席にいた人には、従来の性別価値観を持った人や、学生に自分らしく生きるためのエールを送ってくださる人もいました。学生にも客席にもさまざまな考え方の違いがあり、両者がそれを知るよい機会となったと思います。

(本学現代社会研究科2年)

ジェンダー・女性学研究所からのお知らせ

新所長挨拶



ジェンダー・女性学研究所所長 文学部教授 平林美都子

この度、石田好江先生の後を次ぎ、愛知淑徳大学ジェンダー・女性学研究所の所長を引き受けさせていただくことになりました。本研究所は、初代の國信潤子先生が土台作りをされ、先代の石田好江先生が幹を太らせ枝葉を茂らせ、本年で12年目を迎えました。本研究所は、前所長らの尽力で各ジェンダー関連機関との情報交流も充実し、ジェンダー関連科目やセミナーにおいて、学生や一般市民に伝統的なジェンダー意識からの解放を促すような教育の場を提供してきました。

「ジェンダー」という言葉が世間に浸透してきた一方で、依然、それに違和感や拒絶反応をする人がいることも事実です。男女共同の社会作りが唱えられる現在、互いに尊重し合えるような人を育成するために本研究所も努力していきたいと考えています。

10年を節目にした1昨年、「研究所」の名前にふさわしい研究活動も開始しました。前所長発案による「グローバル化とジェンダー」をテーマにした研究プロジェクトは、本学の専任教員7名が参加し、ジェンダーの視点から個々の研究を再構築しようというものです。本プロジェクトは愛知淑徳大学特別教育研究助成金（平成19、20年度）の対象となりました。この成果はジェンダー教育プログラムの充実のために生かされるとともに、研究成果という形を成して全国に発信する予定であります。現在「教育とジェンダー」という新たな研究プロジェクトも立ち上がりつつあります。教育と研究の場である本研究所を今後とも引き続きご支援いただきますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

ジェンダー・女性学研究所主催

第19回定例セミナーのお知らせ

“わたし”が“あなた”だったら… 取材で日々思うこと

幼い頃も大学生になってからも「記者」という仕事は私の頭にありませんでした。

そんな私が「記者」になり18年。思ってもみなかった人生です。

日々悩み、もがき、時にはうなされながらも、ニュースやドキュメンタリー番組の取材を続けてこられたのは、出会った様々な方たちの「思い」があったからです。

講師

大脇 三千代 氏（中京テレビディレクター）

日時&場所

10月24日（水）16:40～18:10

愛知淑徳大学長久手キャンパス 8号棟 827教室

参加無料でどなたでも聴講できます。

21世紀の今、ASUのジェンダー論、女性学・男性学がさらに面白い!! (一般の人でも受講できます) <2007年度後期>

愛知淑徳大学、ジェンダー・女性学関連の授業

ビジネスとジェンダーⅡ

長久手

講師 / 原山恵子

【授業の概要】

産業社会におけるビジネス行為はジェンダー：社会・文化的性によってその役割、評価、影響などが異なる場合がある。特に日本社会においては女性の経済的地位はいまだ脆弱であり、雇用機会均等法の実施も不十分である。近年の経済のグローバル化のなかで職域、職階、賃金のジェンダー格差にどのような変化が見られるかについて統計データから考察する。また、産業界における人間関係についてジェンダーに敏感な視点をもって考察する。さらに職場の人間関係における問題、賃金格差、地位格差、セクシュアルハラスメント訴訟などについて、その内容について詳細に検討し、今後を展望する。

比較文化

長久手

講師 / 星山幸子

【授業の概要】

国際化が進み、世界の文化について触れる機会が多くなってきた。この授業では、文化を考察する上で必要な概念について学ぶことによって、種々の文化の特徴について考える。さらに、異文化交流についても講義する。

その際、民族、国家、南北問題、ジェンダー等といったさまざまな視点から文化について考える。とくに、イスラームの文化の事例も授業のなかで取り上げる。

国際理解E(開発と女性)

星が丘

講師 / 三輪敦子

【授業の概要】

近代主義の終焉によって展望を見失ったといわれる現代社会の諸問題を、ジェンダー論の視点から分析し、新たな社会的展開の可能性について学ぶ。

女性学・男性学

長久手・星が丘

講師 / 中島美幸

【授業の概要】

男女についての定説化した知識、それによって作り出された役割、人格の内部に及ぶ性別化の影響とその結果生まれる病理などについて、さまざまな事例や理論を紹介し検討する。

産業社会学概論(ジェンダー)

長久手

講師 / 國信潤子

【授業の概要】

本講座は産業社会学と開発社会学の2領域の接点についてジェンダーに敏感な視点から考える。まず日本国内のビジネス・労働界のジェンダー関係を概観し、国境を越えた移住労働者の増加の実態を検討する。次に異なる文化背景を持つ人々の職場での人間関係の問題を紹介し、ビジネス関係や開発協力関係を形成するときに必要となる異文化理解について考える。近年の経済活動は環境に配慮した「持続可能な開発」「基本的な生活ニーズ」の意味をジェンダーに敏感な視点とともに学習する。

ジェンダーと社会

長久手・星が丘

講師 / 中島美幸

【授業の概要】

文学作品を始めとする「表現」を取り上げ、「女」「男」がどのように描かれているか、また、なぜそのように「女」「男」が描かれたのか、社会的・歴史的・心理的視点から考える。また、「表現」された「女」「男」によって、社会や個人がいかに固定的なイメージに縛られているかを認識し、さらに、固着したイメージから自由な、現実の多様な女と男の性と性を「表現」に探る。

ジェンダー論

長久手

講師 / 石田好江

【授業の概要】

近年、ジェンダー (gender) ということが日常生活においても使われるようになってきた。その意味は「社会・文化的に形成される性」の意味である。人は社会的に期待される役割、意識、行動様式などを生育歴のなかで学習する。その過程で個別社会特有の性別役割を習得してゆく。ここ20年ほどの間、従来の「男は仕事、女は家事・育児」といった固定的性別分業は流動化し、女性の経済活動、社会活動の幅は広がっている。このような社会変容の背景、法制度の改革などを紹介し、その社会的意味を考える。

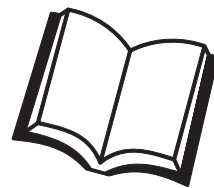
女性学・男性学

長久手

講師 / 中村 彰

【授業の概要】

1996年6月に成立した「男女共同参画社会基本法」がめざす社会システムを検証し、仕事の間や家庭、地域で、私たち男女がフェアで対等に生きるとは何かを説明します。日本における女性運動、男性運動のあゆみにもふれ、先人たちの心根を学びます。セクシュアル・ハラスメント、ドメスティック・バイオレンス、過労死、中高年の自殺など、その時々々の社会問題を男女共同参画の視点で読み解きます。



これらの講座履修・申し込み先

愛知淑徳大学エクステンションセンター

〒464-8671 名古屋市千種区桜が丘23

受付日時 (月～金) 9:00～17:00

TEL/052-783-1665(直通)、FAX/052-783-1621(直通)

ホームページアドレス <http://www.aasa.ac.jp>

編集後記

第17回定例セミナーでは、男女のジェンダーによる非対称性についてあらためて向き合うとともに、双方が抑圧することのない社会を実現していくことの重要性を再認識できました。

なお24号発行の日程上、第18回定例セミナー(9月20日開催)の報告ができませんでした。25号でご報告いたします。ご了承ください。

(高橋)

ASU・IGWS2007年度

運営委員

平林美都子(所長兼)、石田好江、

國信潤子、斎藤和志、若松孝司、

西 和久

事務担当

高橋博子